

氏 名	島村 絵里子
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	博 乙 第 2932 号
学位授与年月日	令和元年9月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	B.ロナガンの倫理思想 —意味と価値を求めて生きる人間主体の歴史への参与—
主 査	筑波大学 教 授 博士（文学） 桑原 直巳
副 査	筑波大学 教 授 文学博士 伊藤 益
副 査	筑波大学 教 授 博士（文学） 井川 義次
副 査	上智大学 教 授 瀬本 正之

## 論 文 の 要 旨

本論文は、20 世紀カトリック世界における代表的哲学者・神学者であるバーナード・ロナガン（Bernard Lonergan,1904-1984）の主著（*Insight* および *Method in Theology*）から、特に彼の「歴史」理解の枠組みを軸に据え、彼の倫理思想を析出することを試みたものである。ロナガンは、認識論、神学における方法論、キリスト論、宗教、経済など多岐にわたるテーマのもとに活動しているが、倫理学を主題的にまとめた形で扱った著作はない。そのため、ロナガンの倫理思想は主著をはじめとする多様な著作の中で断片的に示された倫理学的言及から再構成するほかはない。

ロナガンは、彼が取り組む様々な議論（神学、哲学、経済）の中で、一貫して「一人の認識者そして行為者として、客観性・实在・真理・価値などどのように向かいあうべきか」という課題を中心軸に据えている。この課題は様々な人間の活動が全体として統一性をもって多様に展開していくための土台を、認識という営みを構成する一連の諸行為についての反省、「志向性分析（analysis of intentionality）」を通して見出すことを意味している。ロナガンは人間の内に働く意味と価値を求める志向性（内的促し）に従うことを根本的な人間のあるべき姿として捉えている。

他方、ロナガンは「歴史」を重要な課題として据えていた。「歴史」について *Insight* や *Method in Theology* のようにまとめた主著と言える著作は残されてはいないものの、「歴史」に関する考察は両主著の根底に据えられているものであり、さらには初期から最晩年に至るまでの小論文の中にロナガンの「歴史」思想の痕跡を確認することができる。著者は、ロナガンの「倫理」思想の特徴とその発展可能性を考察する上で有効な手掛かりを、「history that is written about」を対象とした「歴史哲学」に求めている。人間が絶えずより完全なものを目指して「知る」という営みと「行う」という営みは、単に静的な意味で（時空を凌駕した状態で）、真・善・美を希求する（観照する）のではなく、それは「歴史」という舞台で動的つまり「歴史的」にさまざ

まな出来事を通して、実現、そして展開されていくものだからである。

ロナガンは、歴史的なプロセスの方向性を予測するのみならず、その歴史の流れに参与していく手掛かりとして、三つの近接、つまり「進歩」・「退廃」・「贖い」という弁証法的枠組みを指定した。第一に「進歩」は、「もし本来的な志向的意識のはたらきを促す「超越論的命法(transcendental precepts)」、具体的には、“Be attentive(注意深くあれ)”，“Be intelligent(知性的であれ)”，“Be reasonable(理性的であれ)”，“Be responsible(責任的であれ)”，“Be in love(愛の内にとどまれ)” という内的な五つの呼びかけに対し、人間がすべての場面で応えていたならば、その「歴史」はどのようなものとして実現していったであろうか」という問いに答えることによって近づきうるものである。第二に、「退廃」は「超越論的命法を順守しなかったことによって、人間の「歴史」はどのように変化したか」ということを考察することによって導きだされる。第三に、「どのように、第一の本来的な行い(進歩)と第二の非本来的な行い(退廃)の両方が入り交ざった歴史的状況を、本来性の促しに即した調和へと戻すことができるか」という問いへの応答として「贖い」が理解される。

本論文では、ロナガン自身による「歴史」理解と「倫理」への問題意識を引き受け、また先行研究にならない、ロナガンの倫理思想の発展可能性を示唆することを試みている。そこで、歴史における「進歩」・「退廃」・「贖い」という三つの側面の弁証法的緊張を大枠に据え、ロナガンの倫理思想における、<「本性」に中心軸を置き、普遍的な人間の内的ダイナミズムを反省することにより倫理的な在り方を探る道筋>と、<「歴史」の弁証法を基軸とし人間がいかに関与の次元で「創造的」かつ「倫理的」であるかを問う道筋>とを統合する可能性の探究を試みている。本論文は具体的には以下の章構成に基づいて考察を進めている。

『進歩』①：『歴史』を動かす人間の志向性」と題する第1章では、ロナガンの「歴史」および「倫理」思想の基盤となる、ロナガンの人間の認識構造についての理解に光を当てている。第一に、「認識者」として、経験・理解・判断を経て事実・真理へと至るプロセスについて、第二に、「行為者」として、価値判断を経て価値へと関与するプロセスについて確認している。第三に、「認識者」および「行為者」として遂行するこの一連のはたらきを認識的・道徳的・宗教的自己超越として捉え、人間が個として共同体として世界へと開かれていくプロセスを概観している。第四に、「宗教的意識」が「究極的な意味と価値」を求める人間の内的志向性を導き、支えていると見る可能性を確認している。

『進歩』②：意味と価値を求め実現する歩み」と題する第2章では、「歴史」において、「認識者」そして「行為者」として、共時的かつ通時的にどのような「発展」のプロセスを歩んでいくかという点に注目している。第一に、「認識者」としてのはたらきに焦点を当て、人間が構築する「意味」世界の展開を概観している。第二に、「行為者」としてのはたらきに焦点を当て、五つの「価値の階梯」から成る「価値世界」の広がりを確認している。第三に、人間がこの世界で、個として、共同体として善を実現していくプロセスを見定める為の発見的構造を概観している。第四に、ロナガンが自然科学をモデルに見出した形而上学的世界観から捉えた「創発的蓋然性」という「歴史」理解を確認し、人間が世界の「発展」のためにどのような創造的役割を担うものとして理解されうるかについて確認している。

『退廃』から『贖い』へ向かうプロセス①」と題する第3章では、「歴史」における「退廃」の現実、そして、その「退廃」から撤退する可能性について考察している。第一に、「意味」と「価値」を求める営みが、個の次元のみならず、共同体の次元でいかに歪められていくかという点について、「ドラマティックな洞察逃避」、「個人的洞察逃避」、「集団的洞察逃避」、「一般的洞察逃避」という四つの「洞察逃避」を手掛かりに確認している。第二に、*Insight* 第20章で展開される歴史における「贖い」のプロセスについての分析に注目している。そこでロナガンがどのような枠組みによって「悪」の「問題」を示しているかという点について、また愛徳・希望・信仰により、いかにその「問題」の「解決」へと向かうことが可能となるかについて確認している。

『退廃』から『贖い』へ向かうプロセス②」と題する第4章では、「歴史」における「贖い」のプロセスを、ロナガンの言う三つの「回心」から捉え直している。第一に、ロナガンが非本来的な主体のあり方を、「無視された主体」、「切断された主体」、「内在主義的主体」、「疎外された主体」として捉えている点について概観している。次に、非本来性から本来性への立ち返りを、第一に、知的回心（認識者としての自己同化）、第二に、道徳的回心（行為者としての自己同化）、第三に、宗教的回心（超越的存在の受諾）として捉えていく道筋を概観している。さらに、これらの「回心」がどのような意味で「歴史」における「贖い」の重要な契機であると言えるのかという点について、回心の相互関係、その共同体的側面に注目しつつ確認している。

「歴史における『贖い』:『進歩』と『退廃』の緊張」と題する第5章では、「贖い」のプロセスに媒介され、同時に「退廃」の危険にさらされ続けている「発展」のプロセスを検討している。第一に、学問研究と実際の歴史とを、ハサミの「上の刃」と「下の刃」に見立てて捉えることにより、いかに弁証法的な歴史のプロセスの発見的構造を提示しているかについて、第二に、この世界における経験を出発点とした人間の「創造」とそのはたらきを非本来的ありかたから本来的あり方へと引き上げる「癒し」との関係について考察している。第三に、「上から」のベクトルと「下から」のベクトルといった二つのダイナミズムの中で捉えられた「神学における方法」の枠組みを確認し、第四に、「神学における方法」がいかに「倫理における方法」へと応用可能であるかという点に注目し、ロナガンの倫理思想の発展可能性を示唆している。

## 審 査 の 要 旨

### 1 批評

バーナード・ロナガンは、20世紀キリスト教世界における最も重要な思想家の一人であるにもかかわらず、これまでその思想内容を詳細かつ包括的に分析した著作はなかった。ロナガン自身、倫理学を主題的にまとめた形で扱った著作を残してはいない。そのため、ロナガンの倫理思想は主著をはじめとする多様な著作の中で断片的に示された倫理学的言及から再構成するほかはない。こうした条件のもとでロナガンの倫理思想の解明を試みた本論文の企図は、国際的に見ても新しい試みである。論文の意図は明確であり、記述も基本的な文献をよくおさえて展開している。その綿密な分析と論理的な展開とは高く評価するに値する。

ただし本研究には課題も残っている。ロナガン自身の認識論を踏まえつつ、その中から倫理思想につながる要素を忠実に抽出しているように思われるが、思想史的文脈における批判的評価、すなわちロナガンの同時代の倫理思想の動向との関連づけは今後の課題として残されている。また終章で、ロナガンが展開した「神学における方法」を「倫理学における方法」へと組み替えることを試みているが、この点の考察には先行研究に依拠している点が多く、先行研究を超えた独自の理解を展開することが今後の課題である。

しかしながら、これらの課題は、ロナガンの倫理思想について可能な限り包括的かつ明瞭に探求を試みた本論文のすぐれた学的成果としての価値を損なうものではない。ゆえに、本論文は博士学位請求論文として十分な学術価値を有するものと認めることができる。

### 2 最終試験

令和元年7月24日、人文社会科学科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。なお、学力の確認は、著者が「人文社会科学科学研究科論文審査等実施細則」第10条(3)に該当することから免除し、審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

### 3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士(文学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。